

温浴刺激等を含めた新たな看護によって症状が改善した遷延性意識障害患者の1例

○金田 憲司¹、大前 綾子¹、久内 文¹、片岡 恵美子¹、八木 良子¹、
梶谷 伸顕²、萬代 眞哉²、衣笠 和孜²

¹独立行政法人自動車事故対策機構 岡山療護センター、

²独立行政法人自動車事故対策機構 岡山療護センター 診療部

【目的】脳挫傷による遷延性意識障害患者は重度の障害が残り長期臥床となることが多い。その結果、筋群の萎縮や拘縮をきたし、患者自らが生活行動をとることが困難になる。今回、そのような長期臥床患者に温浴刺激等を含めた新たな看護実践を行い、症状の改善が認められたので報告する。

【症例】19歳。男性。彌慢性軸索損傷に対して保存的加療（バルビツレール療法など）を受けた後、受傷3ヶ月後に当院に入院。入院時には、口や左第1指、左足趾に微かな自動運動が認められるのみの完全型植物症の状態であった。入院時より表情筋、口腔内マッサージ・摂食訓練・端座位訓練などを実施したが微細な表情変化は見られたものの、四肢の動きに大きな変化はなかった。受傷後1年10ヶ月経過した時点で、温浴刺激療法・肩や腰部、臀部への用手微振動・バランスボールを用いた運動療法等の看護を週5回、4週間ずつ2クール追加した。1クール目終了後、声かけと状況に合わせて笑顔が見られるようになり、左下肢や両腕を挙上しようとする自動運動が出現した。2クール目終了後、左下肢をベッド上で音楽に合わせてリズムカルに動かし、より多彩な感情表現ができるようになった。

【考察】温浴刺激療法は副交感神経に刺激を与えて筋肉を弛緩させ、リラックス効果があると言われている。また、用手微振動やバランスボールを用いた運動療法は筋膜癒着を改善させ筋肉の柔軟性を高めると言われている。今回の症例ではこれらの方法を複合的に実施した相乗効果が、両腕や左下肢の自動運動の出現、笑顔表出に繋がったと考えられる。今後、症例を増やし、この新たな看護方法についてより詳細に検討する必要があると思われる。